

「石垣島・白保のサンゴ礁文化を学ぶ」

担当教員名 梶 裕史

コース概要

日程	2018年3月1日～3月5日
場所	沖縄県石垣島白保集落
参加人数	14名

コースのねらい

「サンゴ礁文化」とは何か、それを継承する意義とともに、住民主体で持続的な地域づくりに取り組んでいる白保集落で開始された、手づくりの「スタディツアー」に参加して実感的に体験学習します。

内容

日本最南の沖縄県八重山諸島・石垣島にある白保集落は、かつては「魚湧く海」と呼ばれた豊かなサンゴ礁の海に面して、自然の恵みを持続的に暮らしに活かす「半農半漁」の自給自足的な生活文化を築いてきた農村です。この白保は、海の埋め立てによる新空港建設計画をめぐる長年の苦難を乗り越え、21世紀から、外部自然保護団体WWFが設立した組織「しらほサンゴ村」と住民有志との協働により、サンゴ礁文化の継承による持続的な地域づくりを始めました。その活動は現在第二段階に入り、NPO 夏花という新たな住民組織に受け継がれています。このNPOが収入源の一つとして始めたのが、地域のとりくみを体験実習するプログラムを豊かに含む「スタディツアー」です。本FSでは、初日の午後に現地集合し、夕方からスタディツアーに参加しました。今回は天候に恵まれ、昨年要望したものの中止となった「漁体験」を初めて経験することが出来て、恒例の夕食交流会も含めて、白保の方々と私たちとの親しい付き合いがまた深まったことを実感する5日間になりました。



漁体験



シュノーケリング



習った伝統芸能を交流会で披露

- 1日目：**午後、干潮時にワタンジ（サンゴ礁の干潟）観察後、夕方から「入村式」。サンゴ礁文化のレクチャーなど
- 2日目：**午前 NPO 夏花理事長のガイドで、沖縄の伝統的な集落景観の「原風景」が残る集落を散策。途中、古民家の庭で名物オパアを講師として、方言講座（交流会での自己紹介用）
午後 サンゴ礁の「イノー」（浅い海）で「漁体験」。一部、白保の子ども達も参加。
夕方～ 白保の方々と夕食交流会。学生は方言自己紹介のほか、余興として即席で習った「子守歌」の歌と踊りを披露。
- 3日目：**午前中、民宿マエザトのシュノーケル船にてサンゴ礁観察のシュノーケリング
午後 マイクロバスによる石垣島見学 （この日のプログラムはスタディツアー外の自主企画）
- 4日目：**・「グリーンベルト」植栽の代表的な素材である月桃（げっとう）の高度加工施設の加工体験
・「白保日曜市」見学（地域活動の重要な収入源で、月桃を使った新商品など地産地消の「6次産品」販売も豊富）
・午後 ホームステイ先の「稼業」体験（野菜農家など） 夜は3家庭に民泊

5日目：午前 赤土流出防止植栽活動として、糸芭蕉約300株を植える → 午後「離村式」(NPOスタディツアー終了)、解散

日程をみると、「海」と離れてみえるプログラムも少なくない印象があると思います。全て、海と陸上の暮らしぶりとの密接なつながり—白保住民がエコな農業やライフスタイルを築かないと、「魚湧く海」「命継ぎの海」の保全是難しいこと—を伝えるねらいがあります。サンゴ礁を健康な状態に保っていくためには、地域をあげての陸上のとりくみが不可欠であり、しかもその活動がボランティアではなく収益を伴うことが、住民参加を促進するために非常に大切です。よって有料のスタディツアーに参加することは、ささやかながら白保の持続的な地域づくりに貢献することにもつながるのです。

このスタディツアーの最大の「売り」は、意識の高いNPO理事クラスの家庭に分宿し、稼業を体験するホームステイでしょう。1泊がこれに当てられ、体験者は、単に「自然」にふれるだけではなく、伝統的な生活文化の生きた体現者、すなわち自然に寄り添って生きる力を豊かに持つ人々と親しく触れ合えることこそ、自然と共生してきた文化が残る場所を訪問する最大の魅力であること—「人」が地域の最も尊い資源であること—に気付けるはずです。

そして、一度きりの旅ではなく、リピーターとして、「白保ファン」になって再訪してくれ、地域活動のサポーターになってくれるようなゲストを増やすこと、これがNPOがめざす「交流」なのです。私達はささやかながら白保サポーターの一員となるべく、継続的な参加に加えて、プログラム作りにも協力していきたいと思っています。



方言講座



—昨年FSで植えて育ったグリーンベルト



交流会で、民泊先ペアレントと共に

学習を終えて

「白保の人々の生活文化と海との深いつながりを実感」 1年生(参加時) 佐藤南帆

白保フィールドスタディーでは、実際に参加すると環境保全について学ぶだけでなく現地の方々と交流しながら白保の昔ながらの生活文化や伝統について学ぶことができました。子どもから大人、色々な方々と交流することで白保の実態をよく知ることができ、海を守るための知恵が詰まった文化が子どもまでしっかりと受け継がれていることがわかりました。「海は小さい頃から当たり前にあるもの」と民泊でお世話になった長間さんのおっしゃっていたように、海は白保に住む人々の生活の一部であり、自然と生活文化の深いつながりを身をもって感じることができました。

「夏に再訪してくれて、今では愛称で呼び合う仲」 長間盛子さん(民泊先ペアレントのお一人)

都会の女の子四人が我が家に来たときは、一気に華やき眩しかった事を思い出します。オバアの田舎料理を美味しいと言ってくれたり、優しく話しかけてくれたり・・・彼女達が帰った後は本当に寂しかったです。四人のうち二人が、夏休みにゼミ合宿のついでに前泊で遊びに来て、日曜市を手伝ってくれたりしました。この二度目はぐっと距離が縮まり、孫ほどの年齢差ですが、今ではお互いを愛称でよびあっています。